
y u r u s i n o

希菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

yurusingo

【コード】

N5671J

【作者名】

希菜

【あらすじ】

もしも罪を感じたとき、どうしますか？

白

そのすべてが白いのは、そうあるべきだからかもしれない

私にはこつみえる

それはミルクのようにとろりとやさしく

ひかりをはねかえさない黒のようないろだと

だからかもしれない、わたしがここを選んだのは

しろい教会はなにもいわない

ここにはもちろん誰もいないわけではない

それにしても静かで

わたしはもしかしたらいまこえをあげて叫んでいるのかもしれない

他人がいないここにはもしかしたらわたしもいないのかもしれない

それらの意識がまだわたしにあしのうらのそんざいをかんじさせてくれる

否、あしのうらの感覚がまだわたしにそのいしきをかんじさせてくれる

それらのきおくはでも、時間をわからなくさせる

ふと、そんなことをかんがえているのは数秒もまえのことだったかもしれない

わたしはやって来た

何をしにやってきたのか

それをあかすころにはもうきつとそれは愚かである

わたしは目をとじてそのいろがきえるまでまった

ふたたびめをひらいたときにはそこは名もあたえられないいろで
うめつくされていた

「なにをなさってるんですか。」

私は今までずっとつぶっていた目をきつと予想以上に大きく開いて彼女を見たに違いない。

そしてこの世の空気というものが瞳の表面を叩いたとき、私は生きていくんだなと自覚すべきと思わされた。

「ここは教会ですよ。あなたのような人がくるべきところではありません。」

人はもしここに色があったとすると、赤に似ていれば赤と、少し青みを帯びていれば紫と、音もなく線を切る。未知のものに対して敬意を配れない愚かな生きものであるのだ。

「あなたのことですわ。」

私はたいして驚きはしなかった。

彼女が私の心を知り言葉を発したことに、私はもはや驚きを隠せないのだ。

「何をおっしゃっているのですか。うまく羅列がまわってらっしゃらないようですが。」

彼女は眉をわずかに歪めて薄い唇をかすらせた。

いや、眉は歪めていないのかもしれない。

「あなたは私のことを彼女と決め付けて疑わないようですが、つ

「まりあなたはそういうことです。」

彼女の肌は白い教会の中でも白を感じさせた。

「会話をしましょうか。」

私の声は高い天井や遠い壁のどこにもぶつかることなく、空気をも震わせないようであった。

彼女は煙のように薄く軽い下着のような衣服をまとい、自然すぎて気がつかなかったが白い髪をしていた。力ない白髪とは違い、主張のある白だった。瞳の奥はさすがに黒く、まるでそこだけが黒くあることを許されているかのようだった。

「それでああなたは何をなさったんですか。」

時計などはどこにもなく、彼女の言葉と私の次の言葉との余白はどのくらいの時で埋められたのかはわからない。

そもそもとりとめもないものを、不確かなものを私たちは小まめに気を配ることで安心をそえて心の床に置く。

彼女が痺れを切らして強い口調になったのも、私がいつまでも彼女を見つめていたからだろうか。

それとも彼女は短気なのだろうか。

いずれにしても私が答えるまでこの先のページは白いままだ。

「罪をおかしてしまいました。」

その言葉がこの場の白を濁らせてしまうような気がして次の言葉の放たれるまでの間、しばし沈黙に耳を傾けた。

「何度ですか。」

彼女の耳は白く美しく、流れる白のあいだからアクセントのように清く突き出ていた。

今私は右耳を見ていたのか、それとも左か。もし片方だけが美しくもう一方が醜ければ、きっと私は醜い彼女の耳を彼女の耳として捉えただろう。

この世のおおよそ醜いと思われるものは目に焼きつき、心に歪な凹凸を残す。

私の醜い部分に対して彼女は詮索を始めた。

むしろそのために来た私にとつてもそれはやはり心地よいものではなく、ただ自らの醜さを認めるばかりだ。

「何度も何度も。」

「そうですね。最初の罪はなんですか。」

自覚というのはその対象が四次元の記憶の中でも大きな単位を占めたときに初めて生まれるものではないか。

自覚を始めた頃には自覚する前のことなど小さいものにしか思えないのだ。

もちろん記憶とは過去のことなのだから振り返り罪を自覚することをさす。

しかし自覚とはそのときの事象なのだ。最初があるとしたら今のこの場と同じ様に、時間などという不確かなもので量れるものではない。

即ち、初めて自覚した罪。

「犬を殺したことです。」

この白い教会は当然ものを言わない。

言葉を唱え続けるのは私自身であることに間違いはない。

だからまるでその言葉をきいたこの教会の白が、白が私の方をみたように感じたのは私の錯覚なのだ。

「どうしてですか。」

彼女の黒い目は私に居場所を与えるように黒く在り続けた。

「理由はありません。偶然です。」

私は見慣れたその犬が飢えているのを気につけずにはいられず餌をやった。

そして犬は死んだ。

それだけのことだ。

「なぜそれを罪だと思ったのですか。」

「罪という言葉を知ったからかもしれない。」

知った言葉は意識をそれのもとへと吸い込む。

痛いものをまず痛いと感じ、優しいひとをやさしいとまとめるのだ。

同様に罪という言葉を知った私はそれを罪だと自覚したのだ。

「あなたは言い訳がましい方ですね。もう少し率直にものを言うてください。あなたにはまだ、時間も記憶もあるので。」

私はきっと私が思う以上に異常な心持なのだ。

冷静を上手に取り繕っているのだ。

それではさて、始めようか。

許しの請いを。

白（後書き）

続編をかこうか

かくまいか考え中

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5671j/>

y u r u s i n o

2010年10月28日07時22分発行